

平成30年3月1日発行 春燈/第73巻第3号(毎月1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

2018 March

3月号



主宰の句

安立公彦

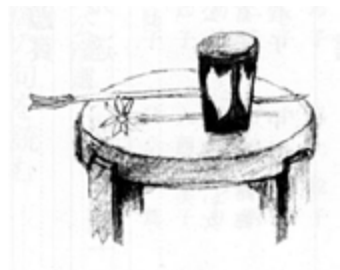
日記買ふひと時の贅ありにけり

祈ること余りに多し初御空

繭玉に集ふ一門幸あれかし

つつましく咲く佗助の花二輪

寒灯の机上もの音絶ゆるかな



安住敦の句の句

春の鴉親に死なれて啼きしかな

『古曆』昭和二十八年

前書に「母急逝」とあるこの掲句、「節分過ぎの寒い日
母は死んだ。父の場合もそうだったように、母の場合も
親不幸の私はその死目に遭えなかった。母は兄に抱かれ
て死んだという」と自註している。安住敦圭句集に二百
余句ある妻子の句に比べて両親の句は三十句に満たない。
後に〈梅咲けば父の忌散れば母の忌よ〉があるように、
その悲しみと無念さが強く感じられる。

清水美子

安住敦の句の句

老いざまはとまれ生きざま年初め

『柿の木坂雑唱以後』昭和六十一年

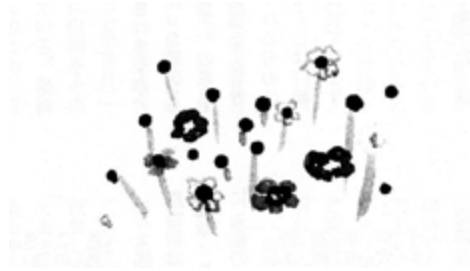
「老いざまはとまれ」自身を叱咤し、年の初め、未来に向けての思いを新たに頑張ろうと誓われる、お心の内をお察しするに余りあるものがある。

昭和六十二年に、俳人協会々長を退く、その前年の句である。心身共の重圧がこの句に重なる。三十年経った現在も、感動を与え続けて止まらない。

後進の歩みを照らす、確かな道標である。

宮 沢 治 子

燈下集



○ 西川保子

待春の空や羽搏くものの殖え(祝・『早春』)
木管の音色ふくよかなる聖夜
雪女か枝折戸ぎいと鳴りにけり
一点景冬ざれの田に鷺立てり
こゑ太き越後訛の飾売

○ 佐藤信子

切り岸に太古の地層冬ざるる
堂塔に日の逃げやすし臘八会
雀らと日溜りわかづ四温かな
風呂吹や灯ともし頃の風の音
数へ日の青空たまふ浅草寺(浅草句会)

○ 山内四郎

日向ぼここな海拔十メートル
独り居の寒い雨ふる窓の外
葱刻むうしろ姿に声かけて
テレビ見つつ湯湯婆の湯を沸かしをり
向き合うて黙つて蜜柑食べてをり

○ 片桐てい女

杉鉄砲山々こはれ弾丸不足
小夜時雨言葉のいらぬ刻はやし
少数派に肩入れて座し去年今年
外に出でよ風花の野を突つ走れ
数へ日のやうな命を子と過ごす

○ 柴崎富子

歩かねば歩けなくなる落葉踏む

婚六十年雑煮の味は姑譲り

口紅の色変へにけり春隣

汲み置きの水きらきらと寒明くる

手にかける水もすつきり春のいろ

○ 園部露郷

熱望の『早春』上梓初あかり

鳥海の山容峨々と冬に入る

けあらしや冬立つ今朝の雄物川（けあらしは護）

夢で得し俳句たふとし桃青忌

蝦夷の血を嗣ぎて好もし熊煮汁

○ 松橋利雄

先達の深き句ごころ敷松葉

元旦の計さしたる事はなかりけり

読止しのはじめより読初す

はればれと男杖持つ初山河

削花夕やみ風をさそひけり（祝・早春）

○ 橘正義

山手線小春日女性運転士

積ん読の机上の冬となりにけり

NHKホールへ落葉踏み急ぐ

マエストロ朝比奈聴くぞ冬休（七十年前）

日本丸眺め近寄り年惜しむ

○ 小林のり人

雪囲手を貸す妻の蝶結び

旦つくのたがひかけひき日向ぼこ

すてかぬる書籍の山や冬日向

図書館の窓嵌め殺し冬木の芽

高齢の紙婚夫婦雑煮かな

○ 三上程子

よき色をちりばめ名草枯れにけり

極上の日ざしのとどく枯木山

大方の男は疲れ近松忌

掛取のごとまだ先ほどの猫のみて

チエーホフの笑ひに寒さありにけり

紅鮭の遠く旅して来る貌

○ 中野あぐり

寒芒つつ立ちて影捨てにけり

くさめして写楽の顔を思ひをり

独り居の暮れて水仙匂ひけり

男雛より女雛やや老け緋毛せん

○ 諸戸せつ子

師の句集机上にありて淑気満つ

数へ日や位置を正して写真立

フルムーン家族で仰ぐ二日かな

お年玉曾孫四人を知らぬ亡夫

津軽三味線撥の捌きも三日かな

○ 大嶋洋子

冬薔薇一輪のみの香なりけり

枯菊にねぎらひかくる思ひかな

ふるさとの駅や母恋ふ時雨の夜

日の射して冬芽ふくらむ雑木山

冬籠亡夫の座空きし歳月よ

ロボットの淹れるコーヒーお元日

○ 綱徳女

着重ねて舞妓の歩む小路かな

こだはりの無き振り通す蕎麦湯かな

風花や治癒告げられし身の軽き

春光や受けし一語を玉と抱く

○ 中村嵐楓子

無意識の底のうごめく寒さかな

燠炉燃ゆ舌の喜ぶタンシチュー

大根の首蒼ざめて売られけり

冬凧や美しき都は海の底

元日やほぼまんなまるき月を上げ

○ 石橋邦子

お正月大手ふりつつあるきけり

川底へとどく水音初山河

初空や二番札所は極楽寺

スヌーピー乗せて小ぶりや鏡餅

ゆづり葉や戦地の葉書読みかへす

余言

安立公彦

外に出でよ風花の野を突つ走れ

片桐てい女

作者の年齢を伏せてこの句を見る人は、作者はまだ壮年期にあると思うだろう。「外に出でよ」の呼出しも、それに続く「風花の野を突つ走れ」にしても、自身壮健の身であつて初めて口に出る言葉である。

作者は九十六歳。一月七日の新年大会にも桐生から参加された。私たちはこういう人生の先輩を同人に載っている。てい女さんだけではない。赤岡茂子さん、齋藤晴夫さん、共に同齡に近い。この句は、そういう人生の先輩からの、それに続く世代へのメッセージである。「風花の野」は厳しい。しかし私たちを包む世情はその厳しさに耐えて初めて可能となる。わが身を正して味わう一句だ。

木管の音色 ふくよかなる聖夜

西川 保子

「木管」は木管楽器の総称。フルートの類。「聖夜」にふさわしい音色だ。「ふくよかなる」が、木管の音色にも

聖夜にも及んでいて、読む人はひとときわが身を一夜の静謐さに置く。幸せな思いを授かる静けさである。

作者はキリスト教徒だろうか。然しこの句には、そういう宗教への言及とは別の聖い一夜の情感が漂う。この句を見てみると、こころの幸せというものを確と感じる。

切り岸に太古の地層冬ざるる

佐藤 信子

昨年十二月の本部句会で特々選に戴いた句。この句の、「切り岸」は、南房総を斜断する養老川の上流、名勝養老溪谷も近い川沿いの断崖を指す。その養老川の流域は、古代上総国の要地で、国府や国分寺が建ち並んでいた。それは『更級日記』がこの地を冒頭として始まるのを見ても頷けよう。また立野信之、上林暁、田宮虎彦などの現代作家らもこの地を小説の一場面としている。

ここは太古、地軸の両端の南極と北極が、現在と逆だったことを示す地質が探査出来る地である。俳句表現の可能性を史実に基づいて綴った「太古の地層」がみごとだ。

木枯が去んで落葉帰根かな

佐々木良玄

「落葉帰根」は、「いかに高木の葉であつても、何れは地に落ち根に帰る」の意。通り一遍の言葉ではない。そうい

う言葉を一句に据えるということとは、作者の心情の動きを示すものだ。同時発表の、「雪降るも止むも位牌に語りかけ」は、一転澄んだ心境を読みとることの出来る句だ。今後とも多彩な表現の成果を期待している。

この里のこの径が好き冬の朝 金山 雅江

この句も十二月本部句会での作品。「この里のこの径が好き」は作者の独語である。久しぶりに帰って来た故郷、数え切れない程の思い出が、幾多の場所で思い出されて来る。その一つ一つは忘れることの出来ない記憶の個室に納まっているのだ。人にはそういう思い出が数多ある。

作者は今そういう里山に佇ち、過ぎ去った日々を反芻している。こころ豊かなひとときである。

ひとときの無心を珠と日向ぼこ 久保 久子

朝から雲一つない冬空の下、縁側に座蒲団を敷いての日向ぼこはいいものだ。「日向ぼこ」という言葉もいい。天の恵みを総身に浴びて、己が心身を日向の温もりがほぐしてくれる。その心身はいつしか無心に澄んでゆく。

作者は今、そういう「日向ぼこ」の只中に居る。風も無く、仰ぐ冬空に鳥の影も見えない。まさに「ひとときの無心」だ。やがてその「無心」を「珠と」抱いている思いに

至る。「無心を珠と」が善い。天守の日向ぼこである。

日脚伸び歩幅大きく歩きけり 宮沢 治子

今年の立春は二月四日。日ごとに日没が伸びている。寒気の中にも何となく春の近づく思いが感じられる。それにしても「日脚伸び」とは善い言葉だ。

作者も今そう思いつつ、日課の散歩に出る。夕空にはまだ雲間に太陽が残っている。作者はいつしか歩幅を大きくして歩き出していた。「歩幅大きく」はいい発想だ。自らの行動に意義を持たせている。更にそれを一句に入れるという前向きな姿勢が一句をベストな表現と為している。

一陽来復言葉に力貰ひけり 矢口 笑子

「一陽来復」は冬至の傍題。歳時記の解説は、「この日太陽は北半球から最も遠ざかり、…昼間の時間の最も短い」と記す。昨年の冬至は十二月二十二日。私の住む地方は、日の出六時四十五分、日の入り四時三十二分だった。冬至の二十日後の日の出は四分遅く、日の入りは十五分遅い。差引き昼の時間は二十日間で十一分伸びている。

しかし季語はその様に理詰めを考えるものではない。作者の思う通り、春を待つ歓びの言葉である。「言葉に力貰ひけり」、如何にも作者らしい善い表現だ。

春燈賞（抄） 25句自選

荒井ハルエ

初春の帯締め固く結びけり

参道の百の菰樽淑気満つ

受けてすぐ破魔矢の鈴を鳴らしけり

残業のビルや余寒の灯をともす

検診を終へて二月の風に入る

白魚の双手に透くるいのちかな

順番に抱かるる稚や雛祭

切株の年輪著き春の雨

咲き満つる桜に雨の募りけり

捨てられぬ行李一つや更衣

さざ波の立ちては消ゆる代田かな

五月田や振返り見る越の山

昼月のうする空や桐の花

声かけて路地に水打つ佃島

夜顔の闇深めゆく白さかな

かろやかに新涼の米とぎにけり

秋澄むや秘仏に結ぶ五色紐

朝顔の藍の深さよ母の忌来

亡き人に良きこと告ぐる星月夜

指笛に牛立ち上がる花野かな

小流れの石に息づく秋の蝶

路地に聞く佃囃子や夕月夜

茶羽織の丸縁眼鏡母恋し

地下道の矢印ばかりそぞろ寒

会へばすぐ里の言葉やのつぺ汁

春燈賞（抄） 25句自選

永井恵子

農機具の描く細畝日脚伸ぶ

卓の椿夜の閑けさに落ちにけり

梅林を抜けて小曲り日豊線

三界に家ありてこの菜飯かな

年忌とて書かねば忘れ鳥曇

沈丁をぬけ来し風の香りけり

朧夜の夢で逢ひしは皆故人

誘はれず誘はず黄金週間過ぎゆけり

浮世絵の一重瞼や夕薄暑

桜蕊降る陸軍墓地の忠魂碑

穀雨かな仕立直しの紺耕

地に近く牡丹は色をひそめけり

水色の朝の来てをり額の花

四阿に雨ひきよする七変化

あぢさゐや友つぎつぎと寡婦となり

涼風の真直ぐに抜くる畳の間

赤紙もて決まる運命うそ寒し

舞鶴の海に父恋ふ秋の虹

湯豆腐や無口な夫と摂る夕餉

小春日の杖はなやかやクラス会

秋澄むや易やすと越す異境

蒟蒻玉歪み坐しゐる道の駅

東山魁夷の白馬秋涼し

白萩を揺らす程良き風の向き

シベリアの極寒を知る父の匙

当 月 集

安立 公彦選



○ 河本由紀子

着ぶくれて明日をおもひ煩はず

水仙や少女の「好き」は恋ならず

悼む人多きこの年冬銀河

冬満月に見透かされをり心ぬち

五十三次夫と歩きし菜飯かな

○ 永井恵子

縁側に積む新米や高く積む

足袋履きて爪立ち軽くなりしかな

クイズ見つつ廻す地球儀冬の夜

柚子風呂の湯加減いかにと母の声

年の夜や仏壇どの子に託すべし

○ 荒井ハルエ

生粹の下町育ち百合鷗

人待ちて一灯増やす冬の宵

亡き人を恋ふ木枯の夜はことに

看病の記録途切るる古日記

寒鴉闇に一声落としけり

○ 石田康明

怒りこそ今年の一字鬼おこぜ(平成十九年)

「春燈」のとこしなへ祝ぐ初日影

海老蔵の睨み随一初芝居

腹立ちを生き甲斐として去年今年

戌年や転び上手の年男

○ 宮崎 洋

歌舞伎座の灯の爛々と憂国忌(銀座五句)

柳散るむかしありけり水の上に

夕星やいくつ聖樹の点るらむ

幸稻荷帯の空より初雀

高麗屋三代襲名四方の春

春燈の句

安立 公彦選

連弾の指生き生きと煖炉炎ゆ

広島 浅田セツ子

冬入日去るもの追うてゆくここち

讚美歌を小声で歌ふクリスマス
短日の千手のほとけをろがむや

東京 小林 文良

寒禽の声の一閃空青し

誕辰の宵や賜る冬苺

南向く廊下書斎や冬日燦

諸人の吉利支丹めくクリスマス
うつ伏せにつつと鍼や小晦日

古曆火伏の札の煤けをり

東京 佐俣まさを

極月や鉄橋過ぐる貨車の列

ローカル線の駅を彩る柿すだれ
しぐるるや京の町屋のうすあかり

千葉 大湊 栄子

手際よく負けやる婆や歌留多取

半玉も小走りに去るしぐれかな

左義長の楯よりもらふ煙草の火

小座蒲団ある待合室や冬の駅

冬木立見上げて急ぐ出勤日

千葉 山浦 紀子

マフラーを巻き直し待つ六本木

葉牡丹や開放感と謂ふがあり

兵庫 秋山 薫

ゴールドの電飾に触れ風師走

葉牡丹にシャーベット状の雨降り

冬うらら嬰抱くごと犬をだく

若水や水の地球に住みし幸

曾孫らに配る年玉包みをり

広島 平絵 美子

正月に着る服選ぶあれやこれ

乗初や夫の運転まだ確か
木枯を上手く避け行く齢なる

東京 中島 美冬

中国語教へてくれし父や冬

ものなべて輝き見ゆるお元日

